

こんにちは。嘱託員の村上です。

1月11日（木）から新しい館内展示「山林に抱かれた青森—林野行政を中心に」が始まりました。山林資源に恵まれた青森市は、明治時代以降、青森大林区署（のちに青森営林局と改称）が設置され、林野行政の拠点としての役割を担ってきました。今回の展示では青森市の豊かな山林と林野行政の歩みを中心にご紹介しています。

さて、私は青森大林区署について調べる中で興味深い人物を見つけました。それは、明治22年（1889）から26年まで青森大林区署長を務めた高橋琢也（1847—1935）です。高橋は安芸国（現広島県）出身で、開成学校（東京大学の前身）でドイツ語を学び、陸軍省などを経て林野行政を担当する山林局に入りました。山林局では海外の林野行政に関する調査に携わり、国有林管理の組織について定めた「大小林区署官制」（明治19年制定）の策定にも関わったといえます。

そして明治22年、高橋は青森大林区署長に任命され、林学の専門教育を受けた優秀な林学士8名を連れて赴任しました。山林局で海外の森林管理制度を調査した高橋は、林野行政を進めるためには林学教育が重要であると考えていましたが、当時は林学を学ぶことのできる学校が少なかったため、専門教育を受けたことのある署員は少数でした。

そこで、高橋は林学の専門教育を行う学校の設立に取り組み、明治25年、青森大林区署の署員や地元の有志と協力して私立教育機関・有余学館を開設しました。この学校は青森町における実業教育の先駆けといわれています。

入学資格は高等小学校を卒業した16歳以上の男子で、修業年限は2年でした。講師は篠沢半五郎、角田礼基ら青森大林区署の職員が無料奉仕で務め、造林学や測量学などの授業を行いました。また、生徒から徴収する授業料だけでは運営資金が足りなかったため、高橋が援助したと伝えられています。

残念ながら高橋は明治26年に高知大林区署へ異動してしましますが、その翌年、有余学館は第1回の卒業生を出しました。10名ほどの卒業生はおおむね大林区署に採用されたといえます。しかし、運営に携わっていた署員が異動したことなどから、運営を続けることが難しくなり、まもなく閉校となってしまったそうです。

※今回の内容は伊東洋『医学校をつくった男 高橋琢也の生涯』、『新青森市史』別編1 教育（1）などを参考にしました。



新浜町にあった青森大林区署
（『青森市史』第5巻付図「青森実地明細絵図」より）